英文學にあらはれたる子供（八）

東京女子高等師範學校教授　岡田みつ

『トム』と『マギー』（つゞき）

――厭な事だらけのマギーの一日――

其翌日は、朝から「マギー」には惡い日であつた。「ルーシー」と一所に居る嬉しさも、午後に「プレット」伯父さんの家へ行つて、樂匣を聞かせて貰ふ樂みも、朝の十一時頃に損はれて仕舞つた。「セント、オッグ」町から來た理髮師が「マギー」の不揃ひの髮を手にしては「まあ之を御覽なさい。ッ、ッ、ッ」など　舌打をして、さん〳〵に惡口を言ふのが、「マギー」には世間一般の自分に對する惡評のやうに聞えるので、此の理髮師位畏ろしい人は他に無いやうな氣がして、此人の店のある通りへは、一生涯行かぬやうにしやうと思つた。

「マギー」の家では、他處へ行くといふ事は、平常も大變な事件なので、もう十二時頃から皆着物を着換へるのであつた。「マギー」が强張つた襟を厭がつて、顏を蹙めたり、肩を扭つたりするのを、母親が「御止しよ。そんな顏を御爲でない」と窘めてゐると、「トム」の方は、他所行の衣服の衣袋へ、平常着の衣袋の中のものを悉く移して（之れが「トム」には身支度をする時の一の樂みなので）仕舞つて、平然と落付いてゐた。而してその頰の紅が、服の紺色に映えて、一段と冴えて見えた。

「ルーシー」は昨日同樣瀟洒とキチンとしてゐた此子は、着物を汚す事がなく、窮屈に思ふ事も無いので、「マギー」が襟が氣に食はぬとて、身を跪

いたり、拗戻たりするのを、不思議さうに、氣の毒がつて眺めて居る。「マギー」は平常なら、疾にその襟を裂き取つてしまふのだが、斷髪一件で、口惜しい思ひをしたばかり故、唯焦燥たり、身を扭ぢたりして居た。

カルタで家を建てるのは、好い着物を着た子供に相當の遊戯だとて、御晝飯の時迄之で遊ぶ事となつた。「トム」は、立派な塔を建てるのだが、「マギー」のは如何しても、屋根を支へるやうにならない。一體「マギー」の爲る事は何でもさうなので、「トム」は、女の子は到底駄目なのだと定めてしまつてゐた。處が、「ルーシー」は案外巧みで、カルタを扱ふのも手柔かだし、その上「トム」に建て方を敎へて呉れと賴んだりしたので、「トム」は頻りに「ルーシー」の手際を、自分のと合せ賞めるのであつた。「マギー」だとて、「ルーシー」の賞めもしたろうし、自分の不細工を機嫌よく眺めもしたろうが生憎襟が強ばつて氣が苛々して居る所へ、「トム」が「マギー」の家の仆れたのを、無遠慮に笑つて「馬鹿」だと言つたので、

マ「笑はなくつたつて宜いワ。私馬鹿ぢやない！兄さんの知らない事を澤山知つて居る！」と息卷いた。

ト「そうでせうよ、怒りッぽさん！御前見たやうな——そんな變な顔をした——怒りッぽい人ありはしない。ルーさんの方が餘程宜い。ルーさんが僕の妹なら可いに。」

マ「まあ非道い。そんな事言ふのは惡い事だワ」と、矢場に「マギー」が立ち上かつた拍子に、「トム」の塔は倒れて仕舞つた。「マギー」は實際倒す氣でも無かつたのだが、周圍の事情が如何にも「マギー」が爲たらしく見えるので、「トム」は顏の色を變へて、物も言はずにゐた。「マギー」を打ちもしたく思つたのだが、弱いものを打つのは卑怯なので、卑怯な事をせぬのが主義の「トム」は手も上げなかつた。

「マギー」は驚き恐れて佇立してゐると、「トム」は倒れた塔の中から、身を起して、眞青な顔をして歩き去つてしまふし、「ルーシー」は子猫が一寸舐るのを止めたといふ風情が、默つて其場の樣を見てゐた。やつと「マギー」は「トム」の方へ歩を進めて、

「兄さん。倒すつもりではなかつたのよ。眞實に〳〵其樣氣ではなかつたの」と言つた。

「トム」は知らぬ顔して、衣袋から二つ三つ豌豆を取り出して、窓を目掛けて親指で彈き出した。初めは的もなく打つて居たのだが、終には、一疋の古青蠅が春の日に弱い身を曝して居るのを目掛けて打つた。

朝がかやうで駄目になつた上に、「トム」が何時までも澄して構ひ付けて呉れぬので、午後伯父さんの家へ行く途中も、「マギー」には、好い空氣も日光も一向身にならなかつた。「トム」は「ルーシー」を態々呼んで、出來かけの鳥の巣を見せてやりながら、「マギー」には見よとも言はず、「ルーシー」と自分とのに柳の枝で鞭を作らへても、「マギー」には上げやうとも言はなかつた。「ルーシー」は「マーさん、一つ欲しいでせう」と言つて見たが、「トム」は聞こえぬ振をして居た。

* * * * *

「プレット」、伯父さんの家へいつてからは、伯父さんは、子供達を見ると、直に自分が退屈忘れの材料にと、錠の下りる戸棚へ秘めて置いた甘い御菓子を、振舞ふと思ひ付いた。で、三人が御菓子を貰つて、手に載せると、「プレット」伯母さんは「今御盆と御皿を上げるから、それまで食べずに待つて御出で。ボロ〳〵零れて困るから」と云つた。「ルーシー」は、奇麗な御菓子で食べるには惜しいと思つて居た所だから、穩順しく待つてゐた。「トム」は大人達が饒舌つてゐる暇に、二口に口の中へ押ん込んで、モグ〳〵嚙んだ。「マギー」は相替らずで「ユリシーズ」と「ナウシカ」の額に

氣を取られて、其御菓子を落して御まけに足で踏み潰してしまつた。伯母さんが酷く焦燥するし、「マギー」は申譯ない事を爲たと自分も思ふので今日は樂匣を聞かせて貰へまいかと落膽してゐたが、聽て「ルーシー」が皆の御機嫌に協つてゐるから「ルーシー」から賴めば宜いと心付いた。で、「ルーシー」に小聲で囁くと、此子は、何時でも人のいふなりになるので、伯父さんの膝許へ行つて顏から首まで眞紅にして、頸飾りを扭りながら、「伯父さん一曲聞かせて頂戴な」といつた。伯父さんは、樂匣を所望されると、中々オイソレと安請合をしないのが例で、「さうさね」と言つて、相當の間が經つてから、やつと承諾したやうな素振を見せるのであつた。

始まる迄が氣遣ひだつた故か、愈々面白い曲が始まつたら、「マギー」の喜びは非常で、心の重荷――「トム」が怒つてゐるといふ――も忘れて、身動きもせず手を拱いて聞きとれてゐた。そのやうな風情を母親は見る度に、「マギー」は色黑でも時折は美しくも見えると慰めるのであつた。曲が濟むだ途端に、「マギー」は「トム」の許へ駈け寄つて首にしがみ付いて「兄さん面白い曲ね」と云つた。

此思ひ掛けもない「マギー」の親しげの素振りは譯が解らぬので、トムは今更のやうに腹を立てたが、「トム」が强ち情なしの子だからといふ譯ではなく、丁度其時、手にカウスリップ酒の入つたコップを持つて居たのを、「マギー」が突き當つて半分ばかり溢させて仕舞つたからで、此場合「どうしたの、氣を御付けな！」と聲荒く言はないやうでは、「トム」も餘つ程な意久地なしになつて仕舞ふ譯だ。殊に、一同が「マギー」の擧動を不都合だと言つて、「トム」の立腹を尤と認める程だつたから。

母「マーさん、何故靜としてゐないの」と母は息立つていふ。

伯「そんな御行儀の惡い子は、伯母さんの宅へ來て

はいけない」と「プレット」伯母さんがいふ。「どうも亂暴すぎるね。御前さんは。」と伯父さんもいふ。可哀さうに「マギー」は面白さも何も心から消え失せて、口惜しい惡いの念のみが蔓延つて來た。

于供達が室内に居る間は、不始末ばかり仕出來しさうなので、母親は折を見計つて「歩いて來た草臥も直つたろうから、庭へ出て御遊びでないか」と勸めると、「プレット」伯母さんもそれが可ろうと云つたが「庭の敷石のの外へ踏み出さないやうによ。其から禽が餌を食べる處が見たければ、馬乘り臺の邊から、遠く離れて御覽よ」と言ひ添へた。いつぞや「トム」が、もし孔雀を嚇かしたら羽の一本位拔ける事と思つて、追ひ掛けまはして居る處を見付つて以來、禽の近くへ行く事を禁止されるやうになつたのである。

* * * *

大人同士は種々話し會つて、もう御茶の時刻だといつてゐると、戸が明いて女中が入つて來た。茶道具を持つて入つて來た事と思つたのに、之れは又意外のものを連れ込んだので、「プレット」伯母さんも「マギー」の母親も一齊に呀といひ「プレット」伯父さんは思はず口に入つてゐた藥を呑み込んでしまつた。意外のものといふのは、「ルーシー」で、頭のそ先から足の先まで半身をそつくり濡れそぼたれて、眞黑な泥塗れの手を差し伸べて、情無さうな顔をして居た。

事の起原へ溯ると、子供達三人戸外へ遊びに出た時に、「マギー」の胸は又もや、むしやくしやして來て、朝の不愉快さ等を頻りに思ひ續けてゐるのに、「トム」の方では、「マギー」が要もない事をしてコップを引くり返させたのが一層腹立たしく「ルーさん、一所にいらつしやい」と誘つて、「マギー」はてんで傍に居らぬ氣にして、庭の蛙の居る方へ歩いて行くのであつた。それを「マギーは」小さな鬼女といふ見得で送つてゐた。「ルーシ

ー」は「トム」が優しくして呉れるのは固より嬉しく、肥つた蟾蜍を糸の先で櫟つて見せて呉れるのが可笑しくもあつたが、「マギー」が居たらこの墓に名を付けて、その身の上を話したりするだろうと思つて、「マギー」も來れば宜いにと思つた。「ルーシー」は「マギー」が目に入る生物を種に、出放題の作り話をして、ヤレ挾蟲が今宅で洗濯をしてゐるのだとか、その子供が煮立つてゐる鍋の中へ落ちたので、急いで醫者を迎へに行く處だなど、云ふのを、半分眞實と聞くのであつた。「トム」はそのやうな妄語を蔑視つて、いきなり挾蟲を踏み潰して事實無根の證據を擧げて見せるけれども、それでも「ルーシー」は「マギー」の言ふ事が幾分道理に思へるし、御話としても面白い話だと思ふのであつた。それ故、今も、一つには肥つた墓の物語が聞きたく。又一つには、優しい氣質の子なので、「マギー」の居る處へ走せ戻つて「大きな可笑しな墓が居るの。マーさん、來て御覽なさいよ」と言つた。

「マギー」は、一言の挨拶もしないで、猶苦い顔をして横を向いてしまつた。「トム」が自分よりも「ルーシー」を好くのが怨みの一つなので、先刻までは小さな白鼠に酷い事の出來ぬのと同樣に、愛らしい「ルーシー」に腹は立てないと思つて居たが、それは「トム」が「ルーシー」にはあまり構つて遣らず、自分が大騷ぎして可愛がつてやつてゐたからで、今となつては、「ルーシー」を打つとか抓るとかして、泣かせてやりたい氣が爲出した。よしや自分が度胸を据えて、大膽に兄さんを打つたつて、兄さんは平氣だから何の役にも立たぬが、「ルーシー」を虐めれば、兄さんを弱らせる事になろう。「ルーシー」さへ此處に居なかつたら兄さんは必然もう疾に自分と仲が直つてゐるにと「マギー」は信じ切つてゐた。